

平成26年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：イネ・いもち病（No. 9）

ストロビルリン系薬剤耐性菌の発生状況および
平成27年度のストロビルリン系薬剤の使用方針と防除対策について

平成26年10月30日
鳥取県病害虫防除所

1 ストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の発生状況(表1)

1) 採種ほ場および原種ほ場（いずれもストロビルリン系薬剤不使用）

採種・原種ほ場およびその周辺ほ場について、13地点から計50サンプルを採集して検定を行った。その結果、採種ほ場の2地点から採集した2サンプルが、ストロビルリン系薬剤耐性に関与する遺伝子の変異（1次検定）および本系統薬剤の防除効果の低下（2次検定）を示し、耐性菌の発生が確認された。

2) 一般ほ場

78地点から85サンプル（東部16地点17サンプル、中部37地点41サンプル、西部22地点26サンプル）を採集した。その結果、中部および西部から採集した45サンプルが耐性菌であった。

2 平成27年度のストロビルリン系薬剤の使用方針

下記の理由により、平成27年度から当面の間、ストロビルリン系薬剤(表2)の使用を控える。

- 1) ストロビルリン系薬剤を育苗箱施用している地域では、耐性菌の発生が拡大している。
- 2) 採種ほ場において耐性菌の発生が確認されたことから、未発生地域においても耐性菌発生リスクが高くなっている。

3 いもち病防除におけるストロビルリン系薬剤の代替剤

1) 育苗箱施用剤（オリサストロビン剤（嵐プリンス箱粒剤10等）の代替）

長期効果持続型の育苗箱施用剤としては、イソチアニル、プロベナゾール等を含む抵抗性誘導剤がある。なお、抵抗性誘導剤の苗いもちに対する効果は期待できないので注意する。

2) 本田粒剤（メトミノストロビン剤（オリブライト粒剤、イモチエース粒剤等）の代替）

プロベナゾール粒剤（オリゼメート粒剤等）、ピロキロン粒剤（コラトップ粒剤5等）、イソプロチオラン粒剤（フジワン粒剤等）等がある。なお、いずれも予防剤であり、葉いもちに対しては発病前か発病の極初期に、穂いもちに対しては出穂前の所定の時期に散布する必要がある。

3) 無人ヘリ防除剤（アゾキシストロビン剤（アミスターエイト等）の代替）

いもち病に対しては、既存のいもち病防除成分を含む薬剤を使用する。

4 平成27年度のイネいもち病防除の考え方

1) 基本方針

いもち病多発年の翌年は、育苗期に種子以外の伝染源（被害わら・もみ殻）からの感染リスクが高くなるため、苗いもちや補植用置き苗の葉いもちが発生しやすい。苗いもち発生時には、抵抗性誘導型の育苗箱施用剤（イソチアニル剤、プロベナゾール剤等）の葉いもち防除効果は著しく低下し、追加防除も困難な状況となる。

したがって、平成27年度のいもち病防除では、葉いもち・穂いもちの防除対策の徹底に加えて、苗いもち対策の強化が重要となる。

2) 苗いもち対策の強化

(1) 床土消毒

平成26年と同様に、床土消毒には、ベノミル・TPN水和剤（ダコレート水和剤）の灌注処理または同粉剤の床土混和を行う。なお、必要に応じて他の苗立枯病防除剤の混用または近接処理を行う。

(2) 播種時～育苗期の防除

苗いもち発生リスクが高い地域（①6月移植の地域、②本年いもち病が多発した地域、③5月末移植でハウス育苗を行う地域、④例年苗いもちが発生する地域）では、カスガマイシン剤（カスミン液剤）のは種時覆土前処理、育苗期（1.5～2葉期）の葉いもち防除剤の散布等を行う。

(3) 基本技術の徹底

ア 種子更新、塩水選、種子消毒を徹底する。

イ 育苗場所および温湯種子消毒済みの種子の保管場所の周辺に、伝染源となる罹病わら、罹病もみ殻等を放置しない。

ウ 苗いもちは、過度の加湿や加温、長期間の育苗で発生しやすいので、適切な条件および期間で育苗する。

エ 育苗期にいもち病が発生した場合、発病苗を本田に持ち込まない。

3) 葉いもち防除対策の徹底

育苗箱施用剤の効果を広域でより安定化させるため、下記の対策を徹底する。

(1) 補植用置き苗の撤去を徹底する。

(2) 早期発見と早期防除に努める（激発ほ場の発生は広域での大発生につながる）

(3) 過大な窒素施肥は控え、適正な施肥に努める。また、極端な遅植えはさける。

4) 穂いもち防除対策の徹底

粉剤、水和剤等による出穂前後（穂ばらみ期と穂揃い期）の基幹防除を徹底する。粒剤による予防防除も可能であるが、葉いもち多発生時の効果は低いので、穂ばらみ期に上位葉の発病がみられる場合は粉剤等による防除が必要である。

5) その他

本情報を参考に、各地域の栽培条件（病害虫の発生状況、品種、土質、栽培体系等）を考慮して、適切な薬剤を選択する。薬剤の詳しい情報等が必要な場合は、病害虫防除所に問い合わせる。

表1 ストロビルリン系薬剤耐性イネいもち菌の発生状況

採集場所	採集地点数	採集サンプル数	耐性菌株数
採種ほ、原種ほ	13	50	2
一般ほ場	75	84	45

表2 主なストロビルリン系薬剤

	農薬名	成分名
箱施用剤	嵐プリンス箱粒剤10	オリサストロビン
	嵐ダントツ箱粒剤	オリサストロビン
	嵐スタークル箱粒剤	オリサストロビン
	アミスタープリンス粒剤	アゾキシストロビン
	アミスターアドマイヤー箱粒剤	アゾキシストロビン
本田粒剤	嵐スタークル粒剤	オリサストロビン
	嵐キラップ粒剤	オリサストロビン
	オリブライト粒剤	メミノストロビン
	オリブライト1キロ粒剤	メミノストロビン
	オリブライトパック	メミノストロビン
	オリブライト250G	メミノストロビン
	オリブライトスタークル1キロ粒剤	メミノストロビン
	イモチエース粒剤	メミノストロビン
	イモチエース1キロ粒剤	メミノストロビン
	イモチエースキラップ粒剤	メミノストロビン
	イモチエーススタークル粒剤	メミノストロビン
	イモチエーススタークル1キロ粒剤	メミノストロビン
	イモチエースリンバー粒剤	メミノストロビン
	イモチエースリンバー1キロ粒剤	メミノストロビン
イモチミン粒剤	メミノストロビン	
本田水和剤、無人ヘリ剤	アミスターエイト	アゾキシストロビン
	アミスタートレボンSE	アゾキシストロビン
	アミスターアクタラSC	アゾキシストロビン